

海外体験学習におけるルーブリックの活用

タイ・スタディツアーにおける学びの評価

Application of Rubrics in Oversea Educational Tourism:

An Assessment of Learning in Study Trip in Thailand

同志社女子大学現代社会学部教授 藤原 孝章

FUJIWARA Takaaki

(Faculty of Contemporary Social Studies, Doshisha Women's College of Liberal Arts)

キーワード：短期海外研修、グローバル・シティズンシップ、海外留学

はじめに

近年、短期海外研修に注目があつまっている。理由は2つある。1つは、高等学校や大学において、政策としての「グローバル人材の育成」に対応して1年をこえる長期の留学だけではなく、1ヶ月以内の短期の海外研修の機会もふえてきたからである。2つめは、それにともない、単なる語学留学ではなく、スタディツアーや海外体験学習といった多様な学習内容をもったプログラムが用意され、アクティブ・ラーニング（活動的な学習）を通して育成する資質能力の一つとして、参加者の学びがグローバルな市民性育成と関連づけて考えられるようになってきたからである¹。本稿では、後者について同志社女子大学（以下、本学）の取り組み（タイ・スタディツアー）を事例に海外体験学習のプログラムと参加者の学びの評価を紹介したい。

1. スタディツアーとしての海外体験学習

本学の国際交流プログラムは、国際交流センターがプロデュースする語学研修、単位互換の協定校交換留学、国際教養学科2学年全員（約80名）の1年間留学などの他、学科がプロデュースする授業科目がある。筆者が所属する現代こども学科では、海外視察・交流型（台湾、NZ）およびスタディツアー型（タイ）の「海外こども事情」という短期海外研修（授業科目、2単位、8月下旬の約10日間）がある。筆者は後者を企画、実践している。2005年を第1回として、以後2年に1回継続して実施され、2015年で6回目となった（参加者は毎回約20名）。筆者は、「海外こども事情A」を、2005年以来、「問いをもった旅、学びを得る旅」として、スタディツアーという「旅の形」として位置づけており、目標としてグローバルな視野の獲得、体験学習をとおした資質能力の獲得をめざしてきた²

2. プログラム（訪問先と活動内容）と学びの視点

タイ・プログラムの構成は、①歓送迎会や観光などリラックスできるもの、②学校・施設の訪問や交流、国境やスラム地域、農業地域見学などツアーの目的にそった研修の要素が大きいもの、③ふりかえりやプレゼンなど学びの成果を共有するものという3部だてになっている。また、学内の自主的な研究会の学生が取り組む「絵本プロジェクト」（タイ語のシールを貼った絵本の小学校への贈呈と子どもたちへのタイ語による人形劇のパフォーマンス）も取り入れている。

表1に、2015年（第6回）のプログラムの概要（主な訪問先と活動内容）と学びの視点を示した。学びの視点の1つは、「まなざし」である。見る側／見られる側、買う側／売る側、支援する側／される側という自他の峻別をしない視点、相互に入れ替え可能な視点の獲得である。これがなされないと単なる一過性の旅行者、ゲストになってしまっ、連結性（自分や自国への視点、継続した学びの視点）を失ってしまう。2つめは「変化」である。2013年（第5回）のツアーから実感したのは、タイ北部にもおしよせてきたグローバル化の波であり、タイ社会の急速な変化である。タイはもはや貧困国ではない。中進国（新興工業国）である。大型ショッピングセンターの出現、バイク社会から車社会へのモータリゼーションの変化、高校生にいたるまでのスマホの保持、wifiなどネット環境の整備、農業人口の減少と高齢化、隣国のミャンマー、ラオスからの合法非合法の外国人労働者の増加、ストリート・チルドレンなど可視的な子どもの貧困の減少、中国人観光客の増加などがそれぞれである。変化という視点を持ち、その過程で生起する課題を追究できないと、「路上で働いているこどもがいないからだめ」、「スラムの家屋にテレビやバイクがあるのはおかしい」といった、ステレオタイプを裏返した偏見しか身につかなくなる。3つめはタイ社会における「排除と包摂」の課題である。セックスワーカー、山岳民族、外国人労働者など人の移動（人身取引も含む）にともなう社会の多民族化による市民権や言語、民族における排除と包摂、エイズ孤児やスラム地域、貧困農村など社会の格差化から生じる貧困における排除と包摂である。そして両者は重なりあうことも多い。このような社会の階層性と関係性のなかで動的に課題を追究する視点も重要となっている。

表1 主な訪問先と活動内容（2015年、筆者作成）

訪問先・活動	課題・イシュー	学びの視点
メーサ象キャンプ、山岳民族資料センター、ドイステップ寺院などの名所観光	観光文化、観光のための開発、山岳民族、ストリートチルドレン、経済のグローバル化	観光：見る側・見られる側の視点・ボーダーレスなモノ、人の移動、変化
売春の当事者たちの意識向上や生活支援にかかわるエンパワー財団	山岳民族、売買春、HIV/AIDS、女性のエンパワー	売買春：売る側・買う側の視点、ボーダーレスな人の移動
ISAC（持続可能な農業地域研究所）の社会教育活動	持続可能な農業、女性のための職業訓練	農業の持続性、女性の職業訓練の意義、変化
チェンマイ郊外、サンサイ小学校	タイ北部の移民の子ども	タイ社会における排除と包摂、変化
チェンライ郊外メー・ロー・ライ小学校、絵本の贈呈、人形劇	貧困、HIV/AIDSと子ども支援、参加型地域開発	支援する側・される側の視点、地域における学校・教師の役割
チェンライ YMCA（こどものケアのプロジェクト）、ワカタケホーム（熊本 YMCA の支援）	保健医療活動をとおした地域開発、北タイの地域開発、タイにおける山岳民族の若者寮	北タイおよび近隣諸国における YMCA の活動の意義、山岳民族の排除と包摂

メーサイ、タイ・ミャンマー国境、 国境警察署	国境地帯における人の移動、児童労働、移民労働者、麻薬問題	経済のグローバル化とボーダーレスな人、モノの移動
バンロンサイ（日本のNGO）	エイズで親を失った子どもの支援	施設収容型支援のあり方
スラム地域（チェンマイ YMCA の子ども支援）	スラム地域、児童労働、子ども支援	人の移動、貧困、排除と包摂、変化
オーガニック・マーケット（朝市）、 コーヒー栽培村訪問	フェアトレード、コーヒー栽培	農業の持続性、公正な取引、変化
チャックナム高校訪問	文化交流、ピアサポート	タイ社会の階層性、変化
日々のふりかえり、英語による発表	スタディツアーでの学び。	学びの共有、プレゼンテーション

3. 学びの評価の機会と手だて

海外体験学習は、短期間であっても国境を越えて異なる文化にふれ、現地の人々と交流し、グローバルな課題に直に向き合うなど「非日常」の体験を核とするがゆえに、「行ってよかった」「すばらしかった」「人生観が変わった」といった即時的な学習効果をえられることは筆者の経験からもあきらかである。しかしながら、現地での学びをどう語るのか（体験の言語化）、どのような学びがどのようにして身に付いたのか（学びの契機と変容、メタ認知化）、学びがどうすれば社会化され、持続されるのか（市民性の育成）といった、「体験を学びに変える」手だてが課題であることも経験者ならば実感することである。

表2 学びの評価の機会と手だて

- ① 事前学習での思考地図。課題の探究と発表
- ② 現地でのパフォーマンス（活動）
- ③ ウエビング（学んだこと）とプレゼンテーション
- ④ 帰国便でのプログラム評価
- ⑤ 事後レポート（3000字以上）
- ⑥ 学びの履歴カード
- ⑦ 学びの変容（4契機）の自己評価（ルーブリック）
- ⑧ DWCLA10*の自己評価（ルーブリック）*5参照
- ⑨ 学内・学外報告会
- ⑩ 報告書（レポート）、DVDの作成
- ⑪ 生涯にわたる学び（キャリア形成と変容）

表2に、スタディツアーにおける学びの評価の機会と手だてを示した。

①は事前学習でのグループ活動と発表、②は、グループによる現地での交流、パフォーマンス、③は現地での毎日のふりかえりをふまえた、一人ひとりによる学んだことのウエビングによるまとめとプレゼンテーションである（写真1）。現地ではこの3つめの評価の機会がもっとも学習効果の高いものである。④は、帰国便（乗り換え待ち時間）での、参加度、学び度、推薦度の自己評価を含むプログラム全体の5段階評価（選択式および選択理由の記述）である。プログラムの終了直後であり各年度とも5点満点に近い高評価が与えられており、体験学習・スタディツアーの高揚感、充実感がよく示されている。⑤から⑧は、帰国後、1ヶ月以内での提出とした課題を評価の手だてとしたものである。学生が、フィールドノート（日誌）をもとに自らの学びを焦点化したものである。⑤の事後レポートは文章記述であり、⑥の学びの履歴カードは、現地で英語によるプレゼンテーションをおこなったウエビングをもとに、自らの学びを振り返るものである。⑤の事後レポートは、第1回目から毎回継続しているもので、⑩の『報告書³』の中心となり、一人ひとりの質的な学びの獲得、変容の様子が見て取れる。個人差があるが、⑪の生涯にわたる学びへのヒント、方向性を示すものともなっている。

る。⑥の学びの履歴カードは、2011年から実施し、現代こども学科での4年間の学びの記録（ポートフォリオ）の一つとして、海外こども事情での学びのエビデンスを示すものである。

4. ルーブリックと学びの変容の自己評価

⑦の学びの変容（4契機）の自己評価については、前回（2013年）から導入し、自由記述式とした。学びの変容の4契機にかかわる問いを設け、記述回答を得たのだが、今回は、これをルーブリック化し、事前研修において達成目標として示し、自己評価を数量化できるようにした（表3）。ルーブリックとは、「学習目標との関係において求められる達成事項の質的な内容を文章表現したもので、学習の達成状況レベルを評価する時使用される評価基準」である⁴。4つの契機である①参画性、②状況性、③関係性、④連結性について、10個の規準（〇〇できた）を設け、A：規準をこえて十分に到達した、B：到達した、C：到達しなかった（できなかった）、の3段階の評価を行えるようにした（表5および本文参照）。その際、自己評価の理由などコメント記入欄も用意した。

表3 学びの変容の4契機⁵と10の規準（ルーブリック）

①参画性：参加者による学習課題の設定、学習支援者としての現場スタッフ。
②状況性：脱文脈化された知識、机上の知識ではなく、実践されている活動の現場における文脈の知。
③関係性：参加者間、現場スタッフなどの関係から学ぶ。あらかじめ決められた知識ではなく、その都度創られていく知識＝「動的情報」。
④連結性：学習経験の転移、動的情報の他の場所へのつながり。

参画性	1	自分の学習課題をもち、その学習課題の解決のために自ら調べ、質問し、話し合うことができた
状況性	2	タイにきて見聞し、活動するなかで、「えっ、どうして？」など、事前に調べてきた知識や考えていたこととちがっていて、自分の中でジレンマや葛藤を感じる事ができた。
	3	タイでの活動が、「ああそういうことだったのか、こういうふう考えるのか」という新たな発見や変化につなげることができた。
関係性	4	現地で、スタディツアー（学び合う集団）の一員としての絆を深めることができた。
	5	チェンマイYMCAのスタッフ、現地の子どもや高校生と積極的に関わることができた。
	6	参加者との活動や現地スタッフのアドバイスを自分の学習課題の追究に役立てることができた。
連結性	7	タイで見つけた課題の中で、タイ人にしかできないこと、タイ人と一緒にできること、に分けて考えることができた。
	8	タイで見つけた課題の中で、自分が日本でもできることがあることを発見できた。
	9	タイで見つけた課題の中で、タイだけではなく、日本の課題にも共通しているものがあることを発見できた。
	10	帰国後も今回の経験を活かすことができる。

表4は、参加者20名の集団としての到達度を示すものである。到達度A、Bの合計はどの項目も17人以上（85%以上）であり、連結性7、8をのぞくとあとの8つの規準については、19人以上（95%）であり、スタディツアーにおける学びの変容の契機が優れて獲得されていることがわかる。このような達成度の高い学びが得られた最大の要因は、現地スタッフとの密度の濃い関わり、具体的な訪問先でのフィールドワークとともに、毎日のリフレクションによる情報の共有、議論などが大きく貢献しているものと確信している。

表4 学びの変容の4契機の到達度（筆者作成）

評価	参画性1	状況性2	状況性3	関係性4	関係性5	関係性6	連結性7	連結性8	連結性9	連結性10	合計
A	16	15	17	17	13	15	6	6	13	19	137
B	3	4	2	3	7	4	10	11	6	1	51
C	1	1	1	0	0	1	3	3	1	0	11
*							1				1

* 未記入 A：規準をこえて十分に到達した、B：到達した、C：到達しなかった（できなかった）

5. 海外体験学習において獲得される資質能力-DWCLA10のルーブリック活用-

今回、海外体験学習の評価については、もう一つルーブリック化をはかった。それは、本学が授業科目のシラバスに記入を義務づけている DWCLA10 の力である。DWCLA10 とは、本学の学生が4年間をとおして身につけるべき資質能力、社会人基礎力を示すものでもある。これを、ルーブリック化し、「DWCLA10 はどのような場面で、どのような方法で獲得できましたか」という問いとともにその到達度を、学びの変容と同じく、A、B、Cの三段階で自己評価するものとした。

表5によると、A、Bの違いはあるが、〈3〉創造力、〈4〉プレゼンテーション力、〈9〉自己管理能力をのぞく7項目において、全員が規準に到達した（身についた）と評価している。このうち、Aの規準以上に達した資質能力の上位5つは、コミュニケーション力、変化対応力、分析力、思考力、自己実現力であり、海外体験活動での交流や活動、ふりかえりなどによる自己の学びや自己の成長への気づきをもたらしたものと見える。C評価のある〈4〉プレゼンテーション力については、英語での発表に力不足を感じた結果であり、〈9〉自己管理能力については現地で体調を崩したことの自己評価であると考えられる。

表5 DWCLA10とルーブリック（筆者作成）

1. 分析力、2. 思考力、3. 創造力、4. プレゼンテーション力、5. コミュニケーション力、6. リーダーシップ、7. 思いやる力、8. 変化対応力、9. 自己管理能力、10. 自己実現力											
	<1>	<2>	<3>	<4>	<5>	<6>	<7>	<8>	<9>	<10>	合計
A	17	17	9	8	18	4	16	18	11	17	135
B	3	3	9	9	2	16	4	2	7	3	58
C	0	0	1	3	0	0	0	0	2	0	6
*			1								1

* 未記入 A：規準をこえて十分に到達した、B：到達した、C：到達しなかった（できなかった）

一過性で終わらせないスタディツアーにするには、事後レポートや学びの変容に関する自己評価も重要であるが、自らの体験をいかに他者に伝えていくか、が重要である。「海外こども事情」で学んだことが、教員採用試験や企業での就職活動に大いに貢献したというのは、過去の参加者の多くが認めることである。そのためには、自らの体験をふりかえり（省察）し、客観化し、経験したことの無い他者に伝えていく「自分のツール」にしていく作業が必要である。そのためにも、他者に伝える機会が必要である。今回も、事後レポートが出そろったあとに、学内報告会（写真2）や1年生の授業での紹介、他大学の学生とともに発表する機会を得た⁶。

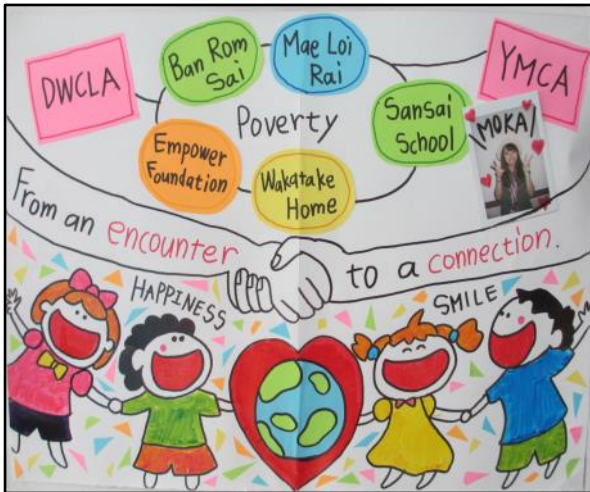


写真1 体験の言語化
(英語でのプレゼンテーション)



写真2 学内報告会

おわりに

ルーブリックの利点は、学びの契機と変容、学びの中味を規準としてあらかじめ示すことによって、参加者の学習の可視化がはかれることである。学習体験の言語化の契機は、現地でのプレゼンテーション、事後レポート等によって保証されるが、それらの一連の活動の意味付け(メタ認知化)を参加者に促すのが、ルーブリックである。ルーブリックは参加者の自己評価であるとともに、担当者の評価規準にもなりうるものでもある。

¹ 日本国際理解教育学会編 (2014 : 36-74) 『国際理解教育』 Vol. 20 号 (特集「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」)

² 藤原孝章 (2013 : 58-74) 「学士教育におけるグローバル・シティズンシップの育成-『海外子ども事情A』(海外体験学習)の場合-」 日本グローバル教育学会 『グローバル教育』

³ 同志社女子大学 『海外子ども事情A タイスタディツアー報告書』 (2015年版)

⁴ 辰野千尋・石田恒良・北尾倫彦 (2006 : 174) 『教育評価事典』 図書文化社

⁵ 渡辺恵 (2001 : 11-21) 「国際協力市民組織 (NGO) における人材育成に関する事例研究-NGO スタディツアー参加者の学習プロセスの分析-」 筑波大学大学院博士課程教育学研究科 『教育学研究集録』 第25集

⁶ 「大学における『海外体験学習』研究会」での発表 (2015年12月、大阪大谷大学アベノハルカスキャンパス)